

10. 欠損値を指定する

社会調査データの場合、無回答や非該当などの欠損データが混じることが避けられません。これらの欠損データには、通常、0、8、9、99 といったコードを与えておきますが、データ・クリーニングや有効回答率の分析などの場合を除いて、これらは分析から排除する必要があります。

欠損値として分析から排除する指定が欠損値指定です。

10.1 欠損値の指定

一般的な書式は、

`missing values 変数リスト (値リスト) / 変数リスト (値リスト).`

例1 `missing values q18d (99).`

q18d に欠損値 99 を指定する。

例2 `missing values q13a to q13f (99).`

q13a から q13f までの変数に欠損値 99 を指定する。

※括弧内に複数の値を入れることもできます。その場合には、値と値の間をカンマもしくはスペースで区切ります。

※ひとつの `missing values` コマンドのなかで、異なる変数リストに対して異なる欠損値を指定することもできます。その場合には、スラッシュ (/) で区切ります。もちろん、`missing values` コマンドを、何回も繰り返してもかまいません。ただし、同じ変数について異なる `missing value` を重ねて指定すると、最後のものだけが有効になります。

10.2 欠損値指定の解除

いったん指定した欠損値を解除したい場合には、括弧内を空欄にした欠損値指定を行います。

基本的な書式は、

`missing values 変数名 ().`

※括弧内にスペースを打たなくても通ります。

※とうぜんながら、コマンドが出現する順番に **SPSS** は変数の処理をしていくので、同じ変数について、必要に応じて、欠損値の指定と解除を繰り返すことが可能です。